佳作

私なりの向き合い方

福岡県 福岡県立小倉南高等学校一年　宮内 紗那

まだ残暑の厳しい四年前の秋、曾祖母が息を引き取った。九十三歳であった。

四年前の日本は、新型コロナウイルスの感染が急激に拡大し世界全体が恐怖と混乱でパニックに陥る、そんな年だった。そんな世の中でありながらも穏やかで曾祖母らしい最後だった。

曾祖母に癌が見つかり、治療を行える程の体力もないことから余命はもって半年だと伝えられた。私は怖かった。会いたい時に会えて、話したい時に話すことができる存在を私は物心ついてから失う機会が少なかったからだ。そのころ私は中学校に上がったばかりで慣れない環境に慣れない生活、部活動、勉強、人間関係と疲労困憊していた。それと同時に曾祖母の身体も少しずつ病に侵されていった。

私はおいしそうにご飯を食べる曾祖母が好きだった。少し頬を赤く染め、曾祖父のことを話す姿、全てが愛おしかった。しかし数日もたつと食事もままならなくなり、最後は流動食になった。自分の娘も忘れ、「はじめまして」と微笑む姿を見て苦しかった。いつしか私のことも忘れてしまうのだろうと思うと会いたいという気持ちより傷つきたくないという気持ちのほうがだんだんと自分の中で大きくなっていった。

亡くなる二週間前、私は会うことを渋った。自分の中で行かない理由を正当化して、目を背けてしまった。次に会えたのは病室だった。その頃の曾祖母の身体には癌の転移が複数見つかり、起きていると全身が痛むことから寝ていることが多くなっていった。

私が病室に行くと、曾祖母は私の名前を呼び手を握った。曾祖母の手は痩せ、骨ばっていて少しひんやりとしていた。私は涙が溢れそうになり唇をぎゅっと噛んだ。

「久しぶり。」

とポツリと呟くと、

「忙しいのにごめんね。」

と言い、もう一度手を握りしめてくれた。いつもの優しいぬくもりを感じた。

それから三日後、曾祖母が息を引き取った。あの時、曾祖母の手に触れたぬくもりはもう戻ってこなかった。今にも起きてきそうな顔は病気の影もなく、安らかだった。徐に曾祖母の胸に頭を乗せ最後のお別れをしていると頭をなでられた記憶がよみがえった。

私が絵で賞をとった時には、将来画家さんになったほうが良いと言い、作文が選ばれた時には小説家が向いていると頭をなでてくれた。なれるわけないのになんて笑っている私にサインもらっておこうかなんて話していた曾祖母。

私は曾祖母にどれくらい恩返しができていたのだろう。それどころか後悔してもしきれないことばかりが思い起こされる。だからこそ、私は曾祖母と過ごした経験を生かそうと思った。

曾祖母の周りにはいつも笑顔が溢れていた。それは曾祖母自身が常に朗らかで笑顔だったからだ。そして寛大な心で私たちを受け入れ自分よりまず相手のことを考える人だった。

曾祖母のように人に接すること。それが今私にできることであり、私なりの向き合い方だと思う。

曾祖母は、第二次世界大戦も経験しており四つの元号を生き抜いた。戦争中の話をよくしてくれた。今になって、当時の話を聞くことのできる機会の価値を知った。

寛大な優しさはきっと、辛さや悲しみも経験したからこそ得たものだったのだと思う。たくさんの学びを与え、目まぐるしく変化する時代を生きた曾祖母は強い人だったのだろう。

先日、曾祖母から私に宛てた入学祝いの手紙を母からもらった。

しなやかで達筆な字は確かに曾祖母の字であった。中には図書カードが入っており、「入学おめでとう。たくさんの本を読んでたくさんの知識をつけてください」と書いてあった。

あの時と変わらない曾祖母がそこにいた。私の中で薄らいでいた姿はちゃんと手紙を通して、その中に存在していた。さらに文末には、「立派な小説家さんになってください」と添えられていた。

手紙は心を動かし、変わらない姿をそこに留めておいてくれる。これから先もまたこの手紙に私は救われるとわかる。なぜならこの手紙を開くたびに、曾祖母が笑顔で背中を押してくれるからだ。その時は素直な私のまま曾祖母に向き会い、応えたいと思う。